

# おっぱい先生

By haniwa

《第一部》

『プロローグ』

「ガラガラ」

生徒「起立、礼、着席」

先生「今日は授業を始める前に少し皆と議論したいと思う。」

生徒 A「何の議論ですか？」

先生「うむ、『おっぱい』についてだ」

生徒 B「おっぱいって、あの成人女性の胸にあるものですか？」

先生「うむ、あの成人女性の胸にあって、まるくて突起物がついているものだ。」

生徒 B「あの成人女性の胸にあって、まるくて突起物がついて、  
C だったり B だったりするものですか？」

先生「うむ、あの成人女性の胸にあって、まるくて突起物がついて、  
C だったり B だったり、張りがあったりなかったりするものだ」

生徒 B「あの成人女性の胸にあって、まるくて突起物が…」

生徒 A「いつまで、やっとなるんだ」

先生「そうだ、おっぱいの議論をする前にきちんと

おっぱいについての定義きめておこうと思う。

まず、辞書には「一杯」の意という。「乳・乳房」の意の幼児語とある・・・

でもな、先生、おっぱいってもっと神秘的なものだと思う、

ときに人はおっぱいによって癒され、おっぱいによって惑わされる、

そんなものだと思う。」

生徒 A「はあ」

先生「その証拠におっばいによって革命がおきた、おっばい革命について話そうと思う  
場所はフランス、飢餓に苦しむ国民に女王はこう言いました。

「左のおっばいがないなら、右のおっばいをもめばいいじゃないの？」

生徒 A「先生、そんな歴史はありません」

先生「ばっかやろう、歴史の教科書だけが歴史じゃねえんだぞ！！」

生徒 A「でも、先生、話し作ったでしょ！」

先生「…」

先生「先生、そういう細かい指摘嫌いだな。

では、こういうのはどうだ？

おっばいひとつ（というか一人分の）の誘惑に勝つことはできるが

おっばい三つ（というか3人分の）の誘惑にはかなうことはできない。

おっばいはそんな神秘的なものだ。」

生徒「??？」

先生「あっ、いやっ、毛利元就の3本の矢のオマージュ…なんだが」

生徒 A「自分で元ネタ解説しちゃったよ」

先生「ならこういう歌はどうだ？

♪おっばい、おっばいを揉む時、あっあっ～、それは今♪」

生徒 A「甲斐バンドのヒーロー？」

先生「おっばいを揉むときのタイミングを間違うな、

またおっばいを揉むタイミングが着たら、

絶対に揉むことだと甲斐よしひろさんは歌ってます」

生徒 A「歌ってねえよ！」

先生「また「あっあっ〜」の部分がとてもなまめかしいと当時話題になりましたね」

生徒「なっていない」

先生「皆は進路を決めたかな？」

生徒 B「俺、決まってねえんだよ、先生いつそのこと決めてよ」

生徒 A「おいおい」

先生「先生は高校のとき、おっばい大学に進路を希望しました」

生徒 B「なにそれ！そんなところあるの！？」

おれ進路きめた！おっばい大学に決まり！」

先生「2丁目にあります。」

生徒 C「えっ！あそこ、たしか「おっばいパブ」だろっ！？」

生徒 B「どっちにしろ行きたい！！」

先生「じゃあ、今度、先生と「体験入学」に行こうか？ちょうど割引券が2枚あります」

生徒 B「いくいく！先生好きっ！」

でも、おっばいはもっと好き！」

生徒 A「なんか、嫌だな この先生」

生徒 D「だから××××だって」

生徒 E「まじかよ××××かよ」

教室の端っこのほうで生徒 D と生徒 E が別の会話をしていた。

先生「おっばい好きといえは、金八先生です。

金八先生は101回目のプロポーズで、」

金八先生「僕は死にません、おっばいが好きだから、僕は死にましえん」

先生「と、おっしゃっています。

おっばいが好きだから死なないってすごい根性ですね。

不死になるには、おっばいを好きになればいいんだ。

と、おっばい好き不死説という新たなおっばい思想を打ち出しました。」

生徒A「いったい、どこから突っ込めばいいんだ？」

生徒E「でも〇〇かもよ」

生徒D「あ〜〇〇ね」

先生「ばっか野郎、生徒Eと生徒D！

今先生がオッパイの話ししとるだろう、無駄話するんじゃねえ！！」

生徒D・生徒E「ハイすみません」

生徒A「先生の切れどころが分からない」

先生「ちょっと気分を変えてここで、葉書を読んでもみようと思います。」

生徒A「なんかラジオDJみたいなこと言い出したぞ」

葉書「先生こんにちは」

先生「こんにちは」

生徒A「きもいっ！こいつ（先生）きもい」

葉書「先生！最近ボク、好きなおっばいできたんだけど」

先生「それはとてもいいことですね。」